

正法

6 1980

心の友を求めて

菩提樹下に悟りをひらかれた釈尊は

一鉢を手にし、心の友を求めて

北に向って歩きだされた

千古の雪をいただいたヒマラヤは

白銀に輝いている

ガンガーの流れは変わろうとも

わが心は永遠に変わらじ

吹く風は冷たく、鉢は空しくとも

釈尊はひたすらに歩まれた

われ、今、釈尊にならいて

北に向って歩まん

心を許して語り合える友を求めて

ひたすらに歩まん

一人の友あれば

手を取り合いて

法のまえに泣かん

インドより帰って

目 次

心の友を求めて……………	園頭広周……………	表紙
巻頭の詩（正法）……………	園頭広周……………	1
特輯 釈尊は日本に生れていられた……………		2
奇蹟の写真……………		32
正法会第一回インド仏蹟巡拝紀行 [2]……………		34
お願い……………		51
特別講演会のお知らせ……………		52
紫水園日記……………	園頭広周……………	53
編集後記……………		59

◇◇◇◇◇ 巻頭の詩 ◇◇◇◇◇



正 法

法こそ永遠

法こそ不変

法こそ頼るべき

説き来たり

説き去って

師は天あま 駈りぬ

正法の時 来たれり

正法の下もと 人々集いて

師の蹤あとに順う。

瞑目して師を偲べば

天空より声あり

「衆生本来仏なり」と。

釈尊は日本に生まれていられた

『このたびは慧星の如く現われて説き去られた高橋信次先生』

昭和四八年一月一三日、この日は私が宗教的な大転換を遂げた記念すべき日である。この夜、東京第一ホテルの一室で「縁生の舟、神理篇」の第一頁を開いた時の感激は忘れることはできない。その時、私は吹田市にあるトールス教団の教務部長をしていた。東京、神奈川にトールス教団の教会があり、私はその指導のために大阪から東京へ出張していたのであった。その日はトールス教の教会の指導はなかった。今日一日なにをしようかなと朝食後思った時、ふと頭に浮かんできたのが「そうだ、生長の家本部を訪ねてみよう」ということであつた。昭和二六年に生長の家の地方講師になり昭和三〇年に本部講師になって昭和四六年二月に生長の家を辞め、同年四月にトールス教の教務部長として迎えられたのであった。

人間はなんのために生きるのか？一〇才頃から考えたこの悩みは、生長の家にいても解決できなかった。

会員であればそのまま黙ってやめればすむことであるが、本部講師として練成部長とか地方講師指導副部長とか、生長の家の最高指導機関の要職にあると、生長の家の教義と組織の矛盾をそのままに、「これはまちがいである」と自分でも信じていることのできないものを会員に信じなさいというわけにゆかなかつた。生長の家に職を奉じている以上は生長の家と矛盾を持たないりっぱな教団にしたかつた。だから昭和四〇年から四六年までの六年間は、生長の家をりっぱな教団にしたいと思う一念からの改革改善案の提出の連続であつた。いったん組織がつくられその組織を通して最初にまちがつたことが正しいことだといって流されると、会員はそのまちがっていることを正しいと信じ込んでしまうために、後から、さきのはまちがいであつたと修正することはなかなかむづかしいことであつた。私の提案が谷口稚春総裁によつて取り上げられようとすると、私の提案が取り上げられると自分達の立場が悪くなると考えた他の講師達が、私の提案を取り上げさすまいとしてあれこれ嫉妬し妨害することも私

は一人で戦わなければならなかった。その結果は多数決原理によつて谷口総裁は明らかにまちがっていることを正しいと決定してしまわれるのであった。私は生長の家を辞める時、「私が提案しましたいろいろなことを取り上げられなかったことは、今後、年に、年を逐うて生長の家をますます混乱させ分裂させる原因となると思ひます」といい、二代目になられる谷口清超先生にも改善案を申上げて真心を尽して辞めたのであるから、そうしたことを知らない人達は、私が辞めたことを「恩を仇で返した」とそしる人達があるが私は少しも気にはしていない。

生長の家を辞め、トールス教の教化部長になったが、私がトールス教本部に着任して四日目にトールス教祖は昇天された。そのため実質的にはトールス教団の教義の最高指導責任者の立場に立たされたのであったが、私は私自身、まだ心の内面に解決しなければならぬ問題を一ぱい抱えていた。誰か自分のこの問題を解決して下さる師はないのか、私はその師を探し求めていた。

はからずも昭和四八年一月一三日午後、生長の本部を訪ねた帰りに、ある人から「園頭先生、すばらしい先生がいられます、ぜひこの本を読んで下さい」といわれて、高橋信次著「縁生の舟 神理篇」「原説般若心経」の二冊をいただいたのであった。

第一ホテルに帰って早速「縁生の舟」の第一頁を開いた。

疑問への探求

精神の問題に関して

「私達の肉体は、いつか亡びる。」

この現象界に、永遠にとどまることはできない……………」

私はこのたった二行足らずをよんだ時に、これを書いた人の霊の次元の高さを感じずにはいらなかった。私はたつたこれだけの言葉で肉体に対する執着を捨てることができた。

同じ言葉をいい、同じことを書いても、それをいい、それを書いた人の霊の次元、心のひゞきが、微妙に聞く人、よむ人の心に伝わってゆくものである。まさしく私は魂を打たれたのであった。縁が熟していたというべき

であろうか。

「人間の苦悩、その原因と結果、この矛盾に対して、私は対決した。

その探求の後、私は、肉体と意識の關係がはっきりと解明されるに従つて、科学の真理は宗教の真理であつて、大自然の万象の中に、万物の靈長である人類の道があるということを知ることができた。

闘争と破壊は人間の道ではなく、動物が進化して行く過程にすぎず、神仏の子たる人間は自然界の支配者であることを悟り、調和の根本原則を實踐しなくてはならないと、思い至つたのである。」

この文章の中の「科学の真理は宗教の真理である」という文字を見た時、私の胸は躍つた。これまで永い間、科学は宗教を否定し、宗教は科学を否定してきた。生長の家では「肉体本来なし、物質本来なし、物質の法則は迷いの法則である」といつて物質科学の法則を否定していた。

昭和四三年五月、私は生長の家の谷口稚春総裁に、生長の家の教義を改めるべきであることを提案したのであつた。

「生長の家が「肉体本来なし、物質本来なし」ということを教義として、肉体に備わる自然の生理作用や物質化学の法則を迷いの法則だとして否定していることはまちがईであると思います。肉体なし、物質なしといつても、たしかに肉体や物質が変化無常の永遠性のない一時的な存在であることは事実ですが、しかし、肉体が肉体として存在し、一定の生理作用を持ち、物質が物質として一定の物理化学等の法則の下に存在しているということは、それは神がそのように存在せしめていたまうのであつて、言葉で迷いの法則だと否定してみても現実には以然として肉体も存在し、物質も存在しております。自分が肉体的存在として現実に存在し、物理化学の法則を応用した飛行機に乗り、テレビを見、冷蔵庫で冷やしたものを飲みなどしながら、言葉の上で観念的に「肉体なし、物質なし」ということを教義していることはまちがईであると思います。」

これに対しては直接にはなんの答えも得られなかったが、私の心の中には、心身一如、色心不二が神理であるとの信念が固まつていた。それだけに「科学の真理は宗教の真理である」という言葉に接した時はうれしかった。この高橋先生という方は自分の考えを理解して下さると思うとうれしかった。なにがかなしいといつても、自分

の心を理解してもらえないことほどかなしいことはない。誰ももう自分をわかつてくれなれいと思った時、人間は死にたくなるものである。私は生長の家という教団の中にいて、生長の家の最高指導層の中に自分がいつていることを誰も理解してくれないことがかなしかつた。周囲が誰も自分を理解してくれないとわかつた時、人間は自分を理解してくれる人を求めて旅に出たくなるのではなからうか。私を理解してくれる人が一人はあると思つてゐる間は私は生長の家にとどまつて生長の家をよくしようと思つてゐた。しかし、その人も所詮は自分を理解してくれない人だつたということがわかつた時、私は、はつきりと生長の家を辞める腹を決めたのであつた。そうして、今、ここに、自分を理解して下さる人がある、と思つたのであつた。だから、うれしかつたのである。

「意識、魂こそ、肉体船の支配者であり、永遠不変の本当の自己である。心は、想念意志の発信所である。この意志によつて、物理的な肉体的行為は現われるのである。

苦しみの原因は、大宇宙の支配者である神仏の意志に反することから人間自身が作り出して行くものなのである。

神仏の意志こそ神理であり、人間の心の中には、誰も過去世で学んだ記憶が記録されている。それは自分自身に対して絶対に嘘をつけない事実である。他人に嘘をいうのは、自己保存、自我我欲を通す場合のみであるのだ」

「この“心”が、神理に適した生活をするによつて、自分自身の平和な安らぎにつながつて行く。球体のように、そうした心の中が調和された状態の人を、円満な人格者といい、そうした人の意志は常に柔軟である。

心はだから無限大に広い人もいるし、特定の思想などによつて自ら心の枠を作つてゐる、小さな心の人もある。物質経済の奴隷と化してしまつてゐる心の持主もいれば、逆に足ることを悟つて、物質文明を支配してゐる心の人もある。

キリスト教の神理も、釈迦の神理も、永い歴史の経過の中で、過去の弟子達や学者、現在の関係者の智性、感情、意志など、誤った「心」によつて歪曲され、宗派の乱立を見るような結果になっているという現象も從つて出てくるのである。

神理を失つてしまつた宗教は、もはや人の心を救うことはできない。」

「意識、魂こそ、永遠不変の本当の自己である」苦しみの原因は自分が大宇宙の支配者である神仏の心に反することから起つてくる」人間の心の中には誰でも過去世で学んだ記憶がある」

私が、この世界が收拾できない混乱状態になつた時、それを收拾できる人はその人がいつているその言葉の裏にあるその人の心を見抜く力を持った一人の人間の存在であると思つたのは一八才の時であつた。

現在はいふこととやることとちがつてゐる人があまりにも多い。日本人は古来、言行一致を徳とし、言行不一致の人を卑んだ。軍隊時代、言行一致たらしめんと努力してゐる人は多かつた。だが、終戦後、宗教の世界にはいつて、本来は人に道を説くのであるから、言行一致の人が多くなければならないのに、言行不一致の人があまりにも多かつた。言行一致はむづかしいことではあるが言行一致となるべく努力しなければならぬ。宗教家も言行一致でなければならぬが、その外に一八才の時に私が言行一致でなければならぬと思つた人に外交官と教育者がある。

世界の歴史をみる時、国際会議の場では、平和とか愛とか戦争をやめようとか表面は口あたりのいいことをいながら、心の中では他の民族を犠牲にして自分達だけの發展を願ひ戦争を計画してゐるという外交官達、各国の指導者達があつた。そういう人達があつたからこそ戦争は起り、今もそういう人達がゐるからこそ一向にこの世界から戦争はなくなるのではないのか。

だから、私は、どんな国際会議であつても、そこにすべての人々の心の中を見通す人が一人いて、その人が発言してゐることと、その人が心の中で計画してゐることと違う人がいたら、その人が、「あなたはいい、こういうわれましたが、心の中ではこう考えておられるではないですか」とズバリ指摘できる人がいたら、国際会議でウソをつく人はいなくなるから、そこから、誰もがいうとおりの平和が実現するだろうと考えたのであつた。

「誰もが過去世で学んだ記憶が記録されている」という言葉を読んだ時、「あ、この人は人の心の中を見る力を持つておられる方だ」と思い、また、「できるなら、自分の過去世を知りたい」と思ったのであった。

私が生まれた時、私の家は貧しかった。戸籍には「私生子」と記されてあった。成長するに従って学校友達や廻りの人々と話してみても、考え方があまりにも違いすぎているので、自分は場違いな所に生まれてきたのではないかと、という気持ちがあった。そのことから、自分の過去世を知りたい、人間の出生というものはどうして決められるのであろうか、それを知りたいと思った。

世界中にただ一人、世界中の人々のすべての心の中を見る力を持ち、すべての人々の過去世を知る力を持つ人があったら、その人、一人の力で世界は変えると思ってきたが、今、そういう人に廻り会うことができるのである。そう思うと私はじつと落着いていられない気がしてきた。

「キリストの神理も、釈迦の神理も、それを伝えた弟子達や学者達の心の次元、心のあり方によって歪められたことが宗派の乱立を生み出したのである」

このことは生長の家にいた時、同じ本部講師であっても、生長の家の教義の理解の仕方、また、それに基づく説法講演の仕方はまた千差万別であった。

私が東海地区教化部長として昭和三七年、愛知、岐阜、三重、滋賀の四県を受持っていた時、生長の家本部理事の中で谷口総裁から一番信頼されていたT理事（産婦人科の医学博士）が名古屋に講演に来られた。私は本部からわざわざ来られるのであるから、会員になるべく沢山聴講されるように通達した。ところが集った人は少なかった。「なぜ来なかったのか」来なかった人達に聞いたら、「いや、私達は園頭先生の話さえ聞いておれば、外の先生の話は聞く必要はありません」という返事であった。

私はT理事という人の人柄を知っていたので、困ったことになるなと思っていたら案の定、谷口総裁から手紙が来た。

「あなたは どうして本部理事の講演に、人が集まらないように妨害するのですか」と
人が集まらなかったのは、私が集まらないように妨害したとT理事は谷口総裁に報告したわけである。私は人

の話を妨害するようなそんな卑劣なことはしない。私はこのことによって、尚のこと、心を見通す力のある宗教指導者の必要性を痛感していたし、心のあり方の違いによって説法講話の違いが出て来て、それによって信者会員が分かれることを見せられたのであった。人の心を見通す力のない宗教指導者が、側近の甘言に実にはたやすく欺されるものであることも知った。

これと同じような事件がづづいてまた起ったことは、生長の家という組織の中での私の立場を悪くすることになった。そのことがあったその年の秋、岐阜県白鳩大会が開かれた。白鳩大会というのは生長の家婦人会の大会で、全国各県は年に一回、必ず生長の家本部婦人局長を招いて大会をやることになっている。その時は、地元の教化責任者である教化部長も一時間ほど講演することが定められていた。

会場にはいった婦人局長F氏は、岐阜県の婦人会長野口てい氏に、

「園頭教化部長の講演を取り止めなさい」といった。

野口会長は、「いや、それはできません。高山とか郡山八幡、白鳥あたりの山の中から出て来た人達は、園頭先生の話を聞きたいからといって出てきているのです。F先生の話だけでしたらこれだけ沢山の人は集まりません」と、あまりにも正直にいつてしまった。

これはまたなにか谷口総裁からいつてくるな、と思つていたらまた案の定。「あなたは どうして、白鳩婦人会の活動を妨害するのですか。教化部長は白鳩婦人会のことは一切ふれてはいけません」という手紙が来た。

またまた、私が妨害したと、婦人局長は報告し、谷口総裁はそれを信じてしまわれたのである。このことさらに私は、なにが事実で、なにが事実でないか、真実とウソを、人の心の中を、全部見通せる指導者がほしいと切実に思つた。私は自分から人の悪口をいうような人間ではない。私はこの頃から、自分は生長の家の中では悪者にさせられてしまう。いつかは生長の家の家をやめて自由な立場で、誰からも束縛されずに真理を求めたいと思うようになった。そのように思つてきたからこそ、この「縁生の舟」をよんだ時に、自分が師として求めていた人はこの方だと、高橋信次先生に一刻も早くお逢いしたいと思つたのであった。

岐阜県白鳩大会が終つて一ヵ月後、緊急に本部通達が出された。

「今後、各県白鳩大会に於いては、男である教化部長の講演は禁ずる」と。さらにF婦人局長は指令を出した。

「白鳩会では、男の講師の話聞いてはならない。白鳩会が聞いてよい男の人は、谷口総裁一人に限ります。各県連合会の会議でも、男の講師や幹部が決定したことに、白鳩婦人会は順う必要はありません」と。

生長の家の白鳩婦人会が、生長の家全体の組織の中で独走を始めたのは、岐阜県白鳩大会でのF婦人局長と野口県婦人会長との意見の相異がきっかけであり、私はそのために、理事の悪口をいう人間として宣伝されてしまった。

自分の利益、自分の立場しか考えない指導者達によって、いかに簡単に真理が歪められるか、また、心ない女が指導的立場に立った時、いかに組織に大混乱が起り、やがてはそれが原因で没落に向かうものであるかを見せつけられた。

このようなことを体験していたので、高橋信次先生の昇天後、未亡人である一栄氏が会長となり、長女の佳子氏が主宰として教団を指導するとなった時に、生長の家と同じような失敗をしないように、それらには、それらの指導的立場にある女性を取巻く男性の指導者がしつかりしなければいけないと思ったものであったが、生長の家は、女は男の話を聞いてはならない、と決めてしまったが、GLAは、四五才以上の人はやめさせる。GLA会員は四五才以下に限定すると決めたのであった。

のことで思い出すのは高橋信次先生が、

「女は如来にはなれない」

といわれた言葉である。女性の役割は、妻となり母となつて、夫を生かし子供を生み育てることであり、子供を生み育てるためには、安心して子供を産める場所、育てる場所がほしいと、そうして、急激に環境が變ることによる不安を持つところから、女の考えはどうしても保守的に狭く小さくなり易い。男の人とは先天的に心の広さ、ものの考え方が違つてゐる点がある。

私はこれらのことから、女の嫉妬心も困るが、男の嫉妬心は尚困る。家庭が調和するためには女が嫉妬心をな

くさなければいけないが、社会のいろいろな組織の中で、男の嫉妬心がなくなれば、住みよい働きよい職場、社会環境は出来上らないと思うようになった。以上のようなことから仏教の真理が説く人の心の次元によっていろいろに段階ができたことがよくわかる。

お経がつくられ始めたのは釈尊が亡くなられて二〇〇年後位からで、それからしばらくすると大乘仏典の創作が行われるようになった。玄奘三蔵法師がインドへ經典を取りに行かれたのは紀元七世紀前半であるから、釈尊が亡くなられてから既に一二〇〇年も経っている。玄奘三蔵は、インド語で書かれたお経を、当時の普通に使われている中国の言葉に翻訳されたのである。日常の通常語に訳されたものであっても、時代が経つと言葉が変わってだんだんわからなくなる。このことは既に日本に於ても、最近の若者達は明治の文学を読めない、誰かが解釈してくれないと意味がわからなくなっているという事実を考えられたらよくわかると思う。

玄奘三蔵が行かれたナーランダ大学は、当時一万人の坊さん達がおられた。このナーランダ大学の一角に舍利弗の塔がある。ナーランダ大学の趾を管理している役人は、「ここは舍利弗がいつも瞑想しておられたところです」と説明しているが、実際はそこは舍利弗の火葬をした場所である。そこに最初阿育王が塔を造って記念としてこのこされた。

その後何回か増築されて今は高さ三〇〇の塔になっている。この塔の上には登ることができる。この塔の上に登るとナーランダ大学の全景と、舍利弗の生まれた部落が目の下に見える。

当時ナーランダ大学には、仏教の学僧だけでなく、インド古来のバラモンの僧もいたのであるから、玄奘三蔵法師が中国へ持つて帰えられたお経の中に、仏教の經典の外にバラモン即ちヒンズー教の教典が含まれていたことが考えられる。

井上靖著「天平の螢」をおよみになった方は四三頁に

「波羅門僧菩提儼那」や「波斯人季密翳」が渡日してきていることをよまれたであろう。仏教伝来とともにバラモン即ちヒンズー教も伝来したことが現在、ヒンズー教の神さまである帝釈天、吉祥天、辨財天などをお寺がまつている原因になっているのであるが、この「天平の螢」の中に、業行というただお経を写すことだけに生命

を掛けている僧が登場していることをご存じであろう。

この業行は、お経にどのようなことが説かれてあるか、そういうことはどうでもいいのである。とにかく一冊でも一部でも余計に写経ができればそれでいいということで写経をするのである。当時、中国の通常語で書かれたお経がいろいろな人によって写経され、それが日本に伝えられた時、そのお経をはじめて聞いてどうしたかを考えてみてもらいたい。

まず、どうよむのか、その読み方から習った筈である。つぎに、それはどういう意味か、一字一句の解釈がされた筈である。その一字一句の解釈のしかたがそれぞれ違ったり、また字句の解釈にとらわれてお経全体の大意をよく把握できなかったという人もあつたであろうし、よくお経をよむことができたという人でも、大部のものを一ぺんに伝えることはできない。まして説く相手は、学問もなんにもない一文不知のともがらということであれば、それらの人にいちばんわかり易いことからなるのは当然であろう。そういうわけで、鎌倉時代の祖師達によって選択ということが行なわれ、法然、親鸞は阿弥陀経などを、日蓮は法華経を、道元は禪を、どれか一つを選ぶことになって宗派が生まれて行つた。宗派は釈尊の教を説いていることはまちがいないが、それはあく迄も一部であつて全体ではないから、その宗派がそのまま正しいというわけにゆかない。たとえば、人間には眼、耳、鼻、舌、身と五官がある。そのうちの眼だけを取り上げて、「これが人間です」というわけにゆかないのと同じである。ところが現在、宗派仏教の人達は、自分の宗派で説いていることが釈尊の教の全部であるかのように信じて、決して他の宗派の教を聞こうとしない。それはその宗派の坊さん達がそのように教えているからである。宗派仏教だけが閉鎖的であるのではない。日本の新興宗教は全部閉鎖的である。広く門を開いて人を救うかのようにみえているが、いったん中にはいると、信者の眼と耳を閉じて、他の教を聞き、他の本をよんではならぬという。

高橋信次先生の兄弟や廻りには創価学会の会員が多かつたとみえて、創価学会批判が出てくる。

「狂信的、戦闘的な信者の指導者の中には、私の知人がおり、家庭を破壊してまでマંダラ信仰に生活を捧げている。

釈迦の仏教は、もはや人間を救うことはできない、と指導者達が教えているにもかかわらず、「爾時世尊 従
三昧 安詳而起 告舍利弗」と経文を上げて勤行しているのである。

世尊とは、誰のことか、日蓮のことであろうか、日蓮を世尊だというならばなぜ「舍利弗」が出てくるのか。

日蓮は仏弟子であつて、世尊ではない。仏法伝道の使命を持って日本に生まれた「光の天使」である。

題目鬭争とは仏弟子の取る行為ではなく、自己宗派保存のエゴイズム以外の何物でもない。仏性を忘却した狂
信者とはいえないのである」

私は時局対策宗教者会議の事務局長として創価学会問題に取組んだことがあるのでこの言葉は全くその通りで
あると思つた。冷静に考えれば創価学会の信仰は全くまちがっているにもかかわらず、何百万という会員が疑問
を持たないことがふしぎでならない。全く無知ほど恐ろしいものはない。日蓮さえあれば釈尊はいらないと折
伏大行進をやつた人達が、今度は、日蓮はいらない、池田大作が本尊であるといい出したのであるから、まさし
く狂気という外はない。

創価学会だけではない。すべての教団の信者達が、自分の信仰を正しいと信じるあまりに自分自身の心の中に
暗黒をつくり出しているのではないか。それは信者の罪ではない。それぞれの教団の指導者達の罪ではないのか。
生長の家でも谷口総裁を、釈迦・キリスト以上の方であると讃えることが行なわれた。そういうことがいい出さ
れた時、私一人は批判的であつた。しかし、全体がそのように信じている中で私一人がそう信じないということ
は結局は異端者であるということになってしまう。

「宗教の世界では正しいものが異端者となつてしまう。生長の家をひつくるめて、現在の日本の宗教家がまち
がつているのか。どちらが正しいか、正しく判断して下さる人がほしい、そういう人は今の日本にはいられない
のか」

私はただ一人の人を求めていた。

「過去世の世界」

指導霊 守護霊の各像

「転生輪廻」

縁生の舟

「神理篇」

過去世より重要な現世

「過去世を知って、悪い業（カルマ）を修正することは、私達の人生修行の目的であるが、過去世がどんな人であろうが、今生は今生であり、大切であることを忘れてはならない。

神理に適った想念と行為が、今生においてより心を進化し、物質経済や諸現象に惑わされない人間となることが必要である。

たとえ過去世が立派であつても、現世で肉体を持つている人間がその価値を見いだせないで自我我欲や諸現象に惑わされていたなら、人間は低俗になるばかりだ。神仏の子たる自覚を持って生活しているかないかによつて、今生におけるその人の価値は違ってくるのである。

上段階光の大指導霊（如来）も、この現象界に肉体を持つてしまうと、普通の人間として修行して行くのである。そのため、環境や教育にも影響され、経済的な苦しみや人生の悩みにもぶつかつて人生に対する疑問を持ち始める。それも、前世と同じ間違いを犯すことを恐れて、僧侶や学者にはあまり生まれてこない。自分に疑問の出る環境、修行のできる場を選定することが常である……。

死の近くで悟つたのでは遅すぎるのだ。五体が健全なうちに、自らも神理を悟り、調和のある人生を、他の人にも教えなければならぬのである。

五世紀の聖徳太子、小野妹子もそうである。

八世紀には伝教大師や弘法大師も出た。

伝教大師の過去世は、中国の隋の時代に浙江省の天台山を開かれた。天台智顗であつた。

伝教大師が天台山で修行していられた時の付人トワン・テン・エンという老僧が、その後に転生輪廻して一三世紀に日本に生まれた。その人が道元禪師である。

インドの時代、釈尊に竹林精舎を寄進されたガランダ長者という方が、後に日本に生まれて弘法大師とられた。弘法大師が書かれた『般若心経秘鍵の中に「私はインドの当時『リヨジュセン』で釈迦牟尼仏の説法を聞いたことがある』と書き残されている。

近年では、学者の中の福田正治といわれる方が、インド時代ナラージュルナー（竜樹）といわれた過去世の人である。

また、一八世紀のスエデンボルグといわれた方は、イエスの弟子でヨハネと呼ばれた方であった。

インドの時代の釈迦の教え、イスラエル時代のイエスの教えにもどり、偉大な心の尊厳を知り、調和のある社会を築くことが必要なのである。

しかし仏教もキリスト教も、あまりにも人々の智と意によって改められすぎている。そのために、大自然を支配している意識、すなわち神仏は偶像化され、さらに光の天使達も偶像化され、拝む宗教の氾濫に浸され末法の世となってしまったのである。

キリストの教えも釈迦の教えも、その真髄が分らなくなってしまったため、多くの衆生は神仏の名のもとに祈ることが宗教であると考えようになり、一握りの悪質な宗教者によって、喰い荒らされる宗教となり果ててしまった。

「そうだ」「そうだ」と独り合点しながら読み進んだ時、私はそれまで頭上に低迷していた永年の暗雲を一気に突き破って、はるかなる神秘の世界へ駆けのぼり、高い高い天の世界から地球をはるかに見おろしているような気持ちになり、この方が自分が求めている人だ、という気が切々としてきて、私はこの「縁生の舟」をよみ終らない間に高橋先生に手紙を書いて、一分でも一時間でも早くお逢いしたいと思って、書き終るとすぐホテルのポストに投函したのであった。

「終戦後、宗教界に身を置き、真理を求めてまいりましたが、わからないことが多く、貴先生のご著書を拝読して、直接お逢いしてご指導を仰ぎたい心に駆られ、認めることにいたしました」

投函してからは、今日はなにか返事があるかと、待ち遠しかった。

二月末であった。吹田市のトウルース教本部に私を訪ねて来られた方があった。

「GLA 関西本部の事務局長をしている中村勇と申します。実は高橋信次先生から電話がありまして、トウルース教本部に園頭という人がいられるので、三月一三日関西本部の講演会の際にお逢いしたいと伝えて下さい。その方は、私にとつては大事な人であるから電話なんかでいいってはいけません。直接あなたが行って伝えて下さい」といふことで、家内と一緒にまいりました。どうぞ早目に関西本部へお出で下さい」と。

私は早く行って待っていた。

高橋先生がはいってこられた。中肉中背の少しふとり気味の丸顔の、少しの威厳もつくろわない、そのまますぐふところに飛び込んでゆけそうな雰囲気、私の心はやわらいだ。それまで私が接触した、自分を偉く見せるために威厳をつくろい、側近を通してでなければ直接には言葉をかけないといったような従来宗教指導者のタイプとは全く違った、いわば気さくな雰囲気、心を打たれた。「そうだ、本当の宗教指導者はこうでなければならぬのだ。殊更に威厳をつくろう必要はないのだ」と思った。

「手紙をさしあげました。園頭です」とご挨拶申し上げた。

「あなたが私のところに来るといふことは、ぼくは五年前から東京の人たちにはいつて来たのです」

「ね、そうでしたね」といって随行してきた幹部の人に証明を求められた。

自分はこの先生の下に最後まで来るように運命づけられていたのか。今まで生長の家をやったこともすべてはこの先生の下に到達するための準備であつたのか、いろいろなことで過去に苦しみ悩んだことも一ぺんにすべてに感謝することができた。

五年前という昭和四十二年である。昭和四十三年という年は、このまま生長の家にとどまっていたのでは、真実の正しい真理を求めることはできない。家族六人を抱えてはいますぐ生長の家をやめては生活ができない。家族を露頭に迷わせるわけにはゆかない。一応九州へ帰って正しいと信ずることだけを伝えて生長の家をやめた後のことを考えようと決心した年であつた。

一つの教団の職員として給料をもらって生活している場合、その教団の教えがどんなにまちがっていると思っても、給料をもらっているのだから教団の教えに従えという上からと周囲の圧力に抗して、正しさを貫くということは大きな忍従を必要とした。私はたとえどんなに圧力をかけられても、また、給料をもらっているからといって、自分でも信ずることのできない明らかにまちがっていると思われることを、本部の決議の通り信者に伝えよといわれても、まちがっていることを信者に伝えて信者を悩ませ苦しめるようなことはしたくない。正しいと信じられる点だけを伝えようと決心して福岡市清川にある生長の家ゆには道場の練成部長として九州に帰ったのであった。

ゆには道場で練成をはじめた時、奇蹟が起った。私が講義を始めると必ず一羽の鳩が部屋へ飛び込んできて私の講義を聞いているのである。練成員が円陣をつくって歌を歌うと必ずその真ん中にはいるのである。最後の修了式まで十日間連続して同じ鳩がはいってきた。ふしぎだ奇蹟だということで他の講師が写真をとった。私はそのことで自分の考えの正しさが鳩を感動させたのだと思ったが口にはいわなかった。

これまでたびたび書いたようにまず第一に

「あなたは宇宙即我を体験したことがありますね。それはあなたが過去世で学んだものです」といわれた。

私が「宇宙即我」を体験したのは「生命の実相」という生長の家で出している本をよんだ直後であったから「生長の家大神」とか「住吉大神」といつている生長の家の神さまのお力であったのかと思ってきたのであったが、それは生長の家の神さまの力ではなくて、自分が過去世で学んだ力であったのだということを知られた。なぜ自分の周辺にいろいろな奇蹟が起ってきたのかその原因がわかるような気がしてきた。自分だけしか知らない、今まで何人かの人に話してみたが理解する人は一人もなかった自分の体験を、この高橋先生にはなんにも話さないのに高橋先生は自分の心の中を見通して全部知っていられる。やはり自分が求めていた方であったと知ることができてうれしかった。

「今まで随分苦勞してきましたね。それらの苦勞も、結局は、今日こうしてここに逢うための準備だったので

すよ」

といわれた時「自分のこれまでの悩み苦しみをこの先生は全部理解して下さい」と、心がやわらいで涙が溢れてきた。

そうしてさらに

「あなたはロスアンゼルスにあるアガシヤ教会のことを知っていますね。あのリチャード・ゼナーを指導したアガシヤの指導霊というのは、われわれの仲間ですよ。」といわれたのであった。

日本教文社が出版した「天と地とを結ぶ電話」をはじめてよんだのは昭和三十年であった。その時、私はこの本の中に書かれてあることが正しいと信じた。私が生長の家の教義の「肉体なし 物質なし」と「無限供給の法則」などがまちがっていること知ったのはこの本をよんでからであった。

「われわれの仲間ですよ」といわれた言葉が気になった。

「とすると、自分もリチャード・ゼナーを指導したアガシヤの指導霊の仲間なのかな、そうでなければあのようにはいられない筈だ」と思ったが、自分で力のないことを充分によく知っている私ば、それは高橋先生の靈の仲間であつて自分には関係のないことだと先きの思いを否定した。

そうして「園頭さん、あなたの心がどうなっているか、ちよつと見てみましょうか」といわれて先生は瞑目し精神集中をされた。

私は過去に大きなまちがいを犯してきた。心の中には醜いものが一ぱいあることは自分でいちばんよく知っているのですが、いよいよ心の中を見られるということになると、とても恥かしく恐ろしくてじつとしていられない、逃げ出したいような気持ちになった。しかし、私は腹を決めていた。「縁生の舟」をよんでから私はさらに自分の過去を反省し、悪かったことは心から懺悔して、もう二度と同じ過ちは犯すまい、生れ変わった気持ちになって再出発だと心に決めていたから、まちがいを指摘されたくすことなく謝まればいいと思つて先生の言葉を待った。

「なにをいわれるかしらん」と思うところわいと思う気持ちもあった。

「わかりました。ほとんど丸いですね。りつぱですね。よし、やり直しだとあなたは思っていますね。それで

いいのです。ただし欠けているのは、これはあなたがあまりにも遠慮深いということで自分ではいいことをしているようでも、かえって相手に心の曇りをつくつてしまうことになる場合がありますから、あまり遠慮してはいけませんね。要は、自分で自分の心に歪みをつくらないことです」

自分の過去のまちがいを一つ一つ指摘されるのではないかと思っていたが、そういうことはなかったものでほっとした。あまりにも遠慮深いといわれてみると遠慮深くして得をしたこともあれば損をしたこともある。今でも気になっていることに、私が中隊長をしている時「いわなくてもわかる人はわかる」と思って遠慮していなかったために、部下の論功行賞が低く評価されたのではなかったかということである。生長の家にいる時も、私は自分の功を人に銜うことはしない方であるから、私はやるだけのことをやって黙っていた。ところが私がしたことを自分がしたように谷口総裁にいった人があった。これはいけない。やはり、いうべきことはいわなければならぬと気づいていった時は、既に谷口総裁は私のやったことを自分がやったようにいってその人がやったものと信じてしまわれた後であったから、逆に私がその人の悪口をいって私が人の功を奪うといわれたことがあった。私はその時、一時は腹が立ったが「天知る、地知る」であると考え直して気にしないことにした。自分でも遠慮深いことが人に迷惑をかける結果になる場合があることはよくわかってはいるが、未だに修正できないでいる。

そのような話が終ったところへ京都の田中利雄という人がはいって来た。

「園頭さん、この人はぼくが大阪の国際ホテルに泊っていた時、目の前に電話番号がパツパツと浮んできて、これはそこへ電話せよということだなと思って電話したら、その番号が国際ホテルのぼくの部屋の番号で、ぼくはこの人が電話をくれることを前以って知っていた。電話がきたのでぼくが「アナン」と呼んだら、この人は電話口で自分の過去世を思い出してぼくと古代のインド語で話したのだ」

「ね、そうでした。田中さん」といわれた。そうして

「園頭さん、あなたも近いうちに自分の過去世を思い出しますよ」といわれたのであった。

田中利雄さんという人が、インドで「阿難」といわれて釈尊の侍者をした人であったとしたら、もし自分もそ



靈道を開いた三鶴山荘

の仲間だったとすると自分は一体誰だったのであろうか。そう思
いながら私はトウルース教本部へ帰ったのであった。

四月八日、関西本部の講演会に行った。私が生長の家をやめた時、
「園頭先生がやめられるなら私達もやめます」といつてやめられ
た宮崎の二人の婦人に高橋先生のことを手紙していたら、その二
人も講演会に来ておられた。

講演が終わって、「園頭さん、今夜、一緒に泊って下さい。宮崎
から来られたご婦人も一緒に、私は個人指導をする人がありま
すので、宿へ先に行っておいて下さい」といわれたので、私達三人
は生駒の中腹にある三鶴山荘に行った。

夕方六時頃になって先生が着かれたというので玄関に出迎えた。
その時の高橋先生の言葉を忘れることはできない。

「あ、 どうして早く風呂にはいつて浴衣に着替えなかったの
ですか」

私達は師を迎えるのであるから当然襟を正し姿勢を正して礼を尽すべきだと思って迎えた。ところが、高橋先
生は早く風呂にはいつり浴衣に着替えてくつろぎなさいといわれるのである。私がこれまで知っている日本の各教
団の教祖という人達は、自分より目下の者に自分より早く風呂にはいつてくつろげとはいわれなかった。口には
慈悲とか愛を説きながら実際には部下の心を思いやるという心くばりのない人達が多かった。もし、教祖より早
く風呂にはいつて浴衣がけで教祖を迎えようものなら、教祖の権威を汚すものとして直ちに追放されるであらう。
淡々としてごく自然にいわれたその言葉にまず私は心を打たれたのであった。

いままで接触してきた人とは全く違うのである。

夕食が終った後、

「園頭さん、精神を統一してみて下さい」といわれた。

生長の家で正座して神想観という観行をやっていた習慣がついていたので、短かい浴衣の前をかき合わせて正座したら、

「あ、そんな窮屈な姿勢では精神統一できません。時間が長くなると足がしびれて、足の方に氣をとられて心は集中しないでしょうが、本当に精神統一をするためには身体はラクにして、どこにも心がひっつかからないようにすることです。あぐらをかきなさい」といわれた。

たしかに生長の家の神想観の坐り方では足がしびれて長くは坐れない。神想観をしなければならぬと教えてあるけれども、神想観をする人が少ないのは足の痛さをはまんしなければならぬからである。足が痛くなってくるとほんとうに精神集中どころではなくなってくる。道場などで神想観をやって「神想観終り」というと、あやつと終ったとフツとためいきをついてまず足をほぐすことをするのである。いわれてみて、またそれまで永く正坐して神想観をやってきた体験から身体はラクにするのがほんとうだと思った。

私は夕食が終ったら、また服に着替えて席を改めてなにかを教えていただくのであろうと、宗教の奥儀伝授の莊嚴な場面を想像していたので、浴衣がけでそのままなにかを教えていただくということにも最初いささかの抵抗を覚えたが、それはそれまでの永い習慣、しきたりからくる思いであって、考えてみると、精神統一と服装とは関係のないことであつた。形式だけを重んずる儀式によつて悟りが得られるものではないのだということがすぐわかつた。

肉体のどこにもとらわれないラクな坐り方。

それは、心と肉体の調和を図るためだということもすぐわかつた。

精神統一という心も身体も固くする人があるがそれではいけない。心も身体もラクにしなければいけないのである。心と肉体とは相関関係にあるから、肉体を緊張させて心はラクであるとか、心は緊張させて身体はラクにとかということとはできない。心をラクに自由にしようと思えば身体にどこにも心がひっつかからないようなラクな

姿勢をしなげない。

だから、禪宗で、手の組み方とか足の組み方とかやかましくいうのは本当ではないのである。ラクにしなさいといわれてハッと思い出したのは昭和十五年、私が中支通城県の第一線で「宇宙即我」を体験した時も、禪宗で教えているような坐り方をしたのではなかった。勿論それまで坐禪を習ったこともないのであるからしなかったのも当然である。「あぐらをかきなさい」といわれたからといって、なにがなんでもあぐらをかかなければならないということもまたないのである。正坐することになれて長時間坐っても足がどうもないという人は正坐してもいいのである。

とにかくその場合、私は浴衣がけであぐらをかいて背骨を正し首筋を正して精神集中にはいった。心が統一し集中してくると呼吸も自然に整ってくるのであって、書店に出ている多くの坐禪に関する本、瞑想に関する本には、むずかしいいくつもの呼吸法が書いてあって、その呼吸法を習得しないと心は集中しないように書いてあるがこれも正しいものではない。

心が集中してくると呼吸は自然に深くなってくる。

折角、坐禪をやり瞑想をやった人が途中で挫折する人が多いのは、心のあり方を教えないでやたらに姿勢や呼吸法をやかましく云うからであると思っている。また、根本的に大事なことは「無念無想」になつてはいけないことである。「有念有想」で精神が統一してゆかないと「宇宙即我」を体験することはできないのである。この一点に於て現在書店に出ている瞑想に関する本はまちがっている。

私が統一にはいると高橋先生が私に右手をかざしてなにかわけのわからない言葉で語りかけられた。「一体、これはどこの国の言葉であろうか、なんということなのであるか」ということと、これからなにが始まるのであろうかという不安感とともに期待感が心の底をかすめた。そのようなその場のことを冷静に見て知っている覚めた心がある反面に、もう一つの心はぐんぐん高く大きくのびひろがって行った。いわゆる言葉の意味は全然わからないが、いわれているうちに腹の底からぐつとこみ上げてくる一つの思い、感情があった。もう一つの覚めた心は冷静に「どうしてこうなるのだろう」と思っている。

二、三分間なにかいわれたがさっぱりなんのことかわからない。いわれたことの意味はわからないが、腹の底からこみ上げてくる。口をひらけばそれがそのまま言葉になりそうな気がしてきて仕方がなかった。

「肉体を持っている人よ、そのまま声を出しなさい」

今度は日本語で命令口調でそういわれた。冷静な覚めた心は、声を出しなさいといわれても、アーとかウーとか言葉にならない声を出すのは恥かしいし、なにかをいえということにはちがひなかるうが、どういつていいのだろうかとか心の中で躊躇していると、また

「肉体を持った人よ、声を出しなさい」といわれた。

その時のような權威ある言葉を私はこれまで聞いたことはなかった。それはそのまま従わずにはいられない權威ある言葉であった。とにかく私は声を出すことにした。口を大きく開いて、「アー」と声を出した。

とたんにその声は言葉に変わった。習ったこともない言葉がつぎつぎに口をついてとび出すと明状しがたい感動が心の中からこみ上げてくる。

冷静な覚めたもう一つの心は、「おれは催眠術にかけられたのではないのかな。いや催眠術ではない。自分の意識はこの通りはつきり目覚めている。口からはつきつぎと知らない習ったこともない言葉が飛び出すのを自分を見て知っている」と思っている。よく靈道現象を催眠術だ暗示をかけられたのだという人があるがそれはちがう。催眠術や暗示は本人が覚醒した後は術中にどういうことをいわれどういうことをされたかは全く知らないのである。しかし、私はそうした靈道現象が終ったのももどろいうことがあつたかを全部知っている。だからその時のことをここにこうして書くことができるのである。

知らない習ったことのない言葉がつぎつぎに口をついて出た。

高橋先生がいつておられる言葉の内容が少しずつわかるようになってきた。ふしぎなことであつた。習ったこともない言葉の意味が瞬間に頭の中で日本語に翻訳されてわかつてくるのである。

そのうちに人の名前が出てきた。高橋先生が「あなたはこういう人を知っていますね、その人ももう生れ変わってきているんですよ」という意味のことを知らない国の言葉でいわれると、私はその知らない国の言葉で、

「知っています、知っています。そうですか。なつかしいです」といつて私の目からはなつかしさのあまりの感動の涙が溢れ、目も鼻もぐしゃぐしゃになって私は泣くのであった。冷静な覚めたもう一つの自分は、人よりも大きな身体の自分が身をよじって感動して涙を流し鼻をぐしゃぐしゃにしているのをじっとみつめている。

何人かの名前をいわれた後、高橋先生は今度は日本語で私に問いかけられた。

「あなたはヘイマカという人を知っている筈です。その人は過去世であなたとどういう関係にあった人であるか、今度は日本語で答えなさい」

一瞬私はとまどった。ヘイマカという人の名など生まれてから一度も聞いたこともないし教えられたこともない。しかし、私に答えなさいといわれることは過去世に自分に関係のあった人であることにはまちがいないだろうと、そう思っと思ひ出そうとしてみても覚めたその心はなんの答えも出してくれなかった。

これはやはりもう一つの心に聞かなければいけないのだと、たった一瞬前まで私を感動させた胸の奥というか腹の底というかじつと潜在された自分の心にしずかに問いかけた。

「このヘイマカという人は、私とどういう関係にあった人ですか」と。
すると答えが返ってきた。私はその答えを否定した。

なぜなら、もし自分がそういう言葉を使わなければならない関係の人が自分の側近にあったのだとしたならば、なぜ自分は今生では貧しい家庭に、しかも私生子として生まれてこなければならなかったのかと、心の中から出てくるその言葉と今生との生活とのあまりにも大きな違いに疑問を持ったからである。だから私は心の中でその言葉を否定した。私が否定した私の心の中を高橋先生は知っておられた。

「心の中から浮んできたその言葉をそのまま口にしないさい」

口にしないさいといわれてもちよつと躊躇せずにはいられなかった。今世での環境からはとても口にしない言葉であったから一瞬躊躇したのであったが、その言葉以外に適当な言葉が出てこないのであれば、最初に出てきたその言葉を口にする以外になかった。もしまちがっていたら教えてもらえばいいと思って口にした。

「その人は私の侍従をしていた人です」

侍従というのは天皇陛下の側近の方を申し上げるのであるから、平凡な民間人のわれわれが口にすべき言葉ではなかったのであるが、その言葉以外に出てこなかったのであるから仕方がなかった。

「そうです。その通りです。その人は今、京都に生まれ変わって出てきております。あと二ヵ月したらその人も私のところへ来る筈です」

そういわれたとたんに、私の目に映ったのは高橋先生の姿の上に二重写しになっているお釈迦さまの姿であった。だから私は「仏陀、おなつかしゅうございます。偉大なる観自在者 仏陀」といって私は高橋先生の前に泣き伏したのであった。

「ウパテッサー（これは私が過去世で生まれた時に付けられた子供の時の名である）二五〇〇年を距ててこの日本で再び一緒に会うことができました。私もなつかしい、インドの時と同じように今世でもやりましょう」高橋先生も泣かれた。一緒にいた人達もみな泣かれた。

あまりにもふしぎな現象であった。事實は事実である。その時のことを思い出すと感動が甦ってきて胸は一ぱいになる。

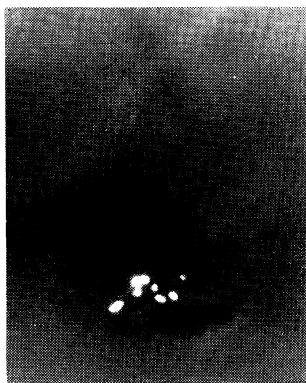
元生長の家をやっていた宮崎から来られた二人の婦人も初めて見る現象に驚きの表情を持って泣いていた。

「あつ、先生の頭に金がついている」

一人の婦人はそういつて私の頭から額のところについている金をとられた。全くふしぎなことであった。

高橋先生が「正しく心を開いた光の天使にはそういう現象があるのです」といわれた。

高橋先生が熱を入れて講演をされると、頭から顔から手のひらにも一ぱい金の粉がついたのは多くの人が見ていた。それが自分の上にも起ったのであった。天上界の神秘力によって、その人の頭上で分子構造の転換が瞬間的に行なわれて金粉が降ってくると



悟りを開いたとき
頭に結晶した金の粒



過去世を思い出して語る

しかいえない。高橋先生の弟子となった者で、金粉の洗礼を天上界から受けたのは私ともう一人は元GLA関西本部の中谷義雄氏と二人だけであった。私は自分の過去世を知ることができたのであった。高橋信次先生が釈尊であったことを私は見たのである。「ブッダー」といって私は高橋先生の前に跪びいたのであった。

五月一三日、関西本部の定例講演会に行った。東京から来た人達数人と壇上ではじめて引き合された。

この時のことは昭和四八年七月一日発行の「GLA」誌にのせられているのでそれを要約して転載することにする。

「私達人間は皆神の子であり、神と同根である偉大なる魂の持ち主であるという自覚を忘れてはならない。この日の講演会でもその証明の一つといえる、偉大なる過去世を思い出された人が出た。その人S氏のご精進に深甚の敬意を表し、その感激の場面を

つぎに述べる。

永遠の生命が――

誰にもあるのです

それを悟ってほしい……………

人間の一人一人が偉大な神の子として、偉大なる神の智慧を誰もが持っている。それを具現した時、人間は本当の調和した環境をつくらなければならないという結論に達してゆく……今、私達のグループの中には、いろいろと凡ゆる転生輪廻の過程を思い出し、そして習わなかった国の言葉で、その当時の生活や環境を、又自

分が望んで今日日本人として生まれて来たということを思い出した。こういう体験をもった人達が多く出ている。人間は正しい神理を心の柱として生活をし、勇気をもって実践することによって前進がある。と力強く結ばれて、「心の窓を開かれた人達を通して転生輪廻の事実を聞いて見ましょう」と現証にうつられた。

ゴータマ・シッダルタが出家した時、五人の弟子達が父王の命でゴータマ・シッダルタを守護すること選ばれたこと、その中にアサジという方がおられたとのことである。

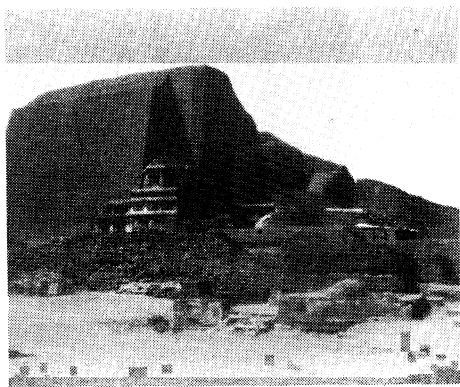
そのアサジの過去世を持たれる北原さんと先生との対話がつづく。

「私達はインドの頃はゴータマ・シッダルタの最初の弟子として心の窓を開いて当時はアラハン（阿羅漢）とよばれたものでございますが、神理という不変なものを知った時、城に居た時よりははるかに平和な安らぎある生活を送ることができました。その後マガタ国のラジャクリハという所に行き、遊行をしている時に「シャリープラトール」という方をブッタに帰依させました。そのインドの頃の私を知っている方が今日この中に来ておられます。その方はウパティッサという名前の方です」

先生は九州から来られたS氏を指さされ、

「あなただそうです……ちよつと来て下さい」と招かれて、S氏に光を入られた。

「私は二五〇〇年前、インドのラジャクリハの郊外に於て、ゴータマ・シッダルタの弟子アサジ、この方を知ることができてブッタに帰依しました」と北原さんと語り始める。そしてお互いに手を取り合つて「本当になつかしい」「永い間会わなかったネ」「ここで会うとは奇遇だ」「ブッタに紹介した時のことを思い出すよ」と



舍利弗の塔

當時のことをいろいろと涙を浮べながらの会話である。

「私達はインドの時と同じように、失われた人間の心の人々に取り戻さなければいけません」このようなことを話し合っている時に、先生が言葉をかけられると、突然S氏の目から涙が吹き出して「おーブッタ」と先生に両手をさし出して縋りつくような身振りになった。高橋先生の目からも涙が溢れ、お二人で話を交わしておられた。

ややあつて、先生はS氏に、「あなたはあの婦人を知っている筈です」と、東京から来られた一人の婦人を指さされた。S氏はその婦人の方を見られたとたん、「おー・マイトレヤー」と呼ばれた。

（これは全くふしぎなことであつた。私は初対面のその婦人を見たたんその人が「マイトレヤー」という名であつて、私が世話し指導した人であつたことがわかつた。その婦人は高橋先生の夫人であつた。インドの当時私の世話になったことをお礼をいわれたのであつた）

一栄先生の顔も涙に濡れて、涙声でなつかしげに相寄られて語り合われた。

先生も涙をふきながら私達に説明を始めて下さる。

「この方は九州で生まれました。それは実在界あの世から生まれて来る時に、それぞれ自分の生まれる場所、そしてその道を説く人に、それがチャンと仕組まれて日本に出て来て来ます。この方は「ウパティッサ」といわれた方です。この方はインドの頃は、ナーランダという所に生まれました。そしてブッタに帰依した後は、ゴータマ・シッダルタ釈迦牟尼仏の右腕といわれた方です。彼はインドの頃を思い出して、このように語っております……」

先生は氏に古代インド語で語り合われつつこれを私達に話してゆかれます。

「心の窓を開いて永遠の生命を知り、そして又心を新たにして多くの人々に正しい片寄らない道を説いて行く……」

現代の仏教もキリスト教も私達がかつてインドの二五〇〇年前に出た、バラモンのプラナーとひとつも変わっていない。むつかしい哲学化して人々の心というものをとらえることが出来なくなった。

その頃私達はブツタの教えによつて、人間の心の普遍的なものを……そして自然を通じ、あらゆる方便をとおして、正しい道を私達は聞きそれを説きました。

みなさんよく聞いて下さい。永遠の生命を、それはみなさんの心の中にみなあるのです。それを悟つてほしい」

そしてこのウパティッサといわれる方が後に「シャリプトラ」¹とよばれるようになった経緯と、般若心経の中に出てくる「舍利子」といわれる方はこの方の名前を、弟子達の代名詞として使つたものである。と結ばれて感動的な現証を終えられた。

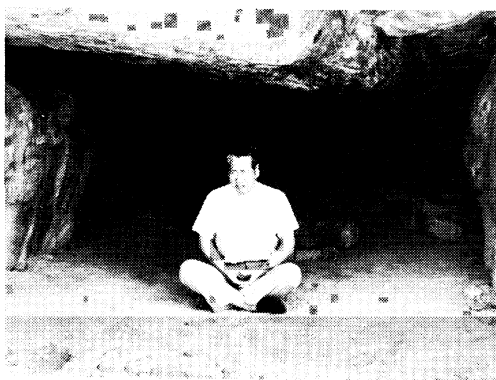
私は、高橋先生と私の出会い、そうして起つた現証を書くべきかどうかについて迷つた。自分のことを自分で書くことは自分を人にてらうようで私の心に染まないことであつた。しかし、私自身が体験した事実は私自身しか書くことができない。書くべきかどうかについてインドの仏蹟巡拝をして心に決めようと思つてインドへ行つてきた。人は輪廻転生するものであることを私は信じている。

三月十一日、紀元前三世紀の阿育王の宮殿跡を見てナーランダへ向い、ナーランダ大学の跡と舍利弗の塔を見、インド政府観光局の役人であるナーランダ駐在のオールビッシン氏とガイドのジャブパットライ氏の案内で霊鷲山に登つた。

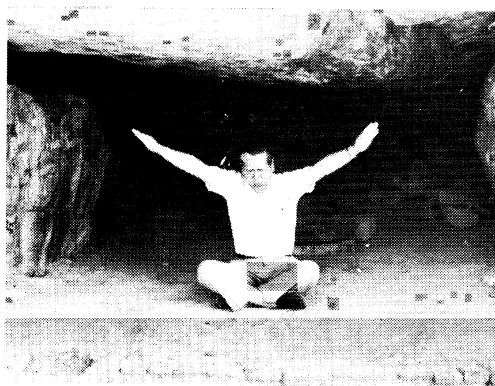
ビンピサラ王が霊鷲山にいられる釈尊に法を聞かれるためにつくられた石畳の道を登ると途中に提婆達多が釈尊を殺そうとして大きな石を崖の上から落した所がある。頂上まで一気に登るには健康体の者でも少し無理である。途中でひと休みして登つた。頂上のすぐ下にいくつか岩窟があつて、オールビッシン氏が、「ここ、シャリプトラが瞑想しておられたところね」という。

そこにはいつて私は瞑想即ち禪定にはいつた。何分とも経たないうちに私は言いようのない感動に胸一ぱいになつて泣き出してしまつた。口から古代マガダ語が迸り出た。そうして私は同行しておられた二十何人かの人々を祝福して光りを与え全人類を祝福した。みんな泣き出してしまつた。

アールビツシン氏は誰からか私がシャリープトラーとしての過去世を持ったものであったことを聞かされていた。終った時、氏は自分から私に握手を求められて、「今日、このように感激し感動したことはありません。私の心は変わりました。先生がここへお出で下さいましたこと、先生をこ



靈鷲山上の舍利弗のいたと伝えられる
岩窟で 2500年前を思い出して感激に咽ぶ



仏陀の名を唱えて光りをうける
この時、25名は全部感激して泣き出した

案内申上げたことを光栄に思います。この感動は一生忘れません」といわれたのであつた。

私はこの禪定で、高橋信次先生との出会いを書くことに決心した。もう一つ決心したことがある。それは私はこのつぎはインドに生まれることである。

釈尊は、人間は神の子で平等であることを説かれ、

カースト制度の廃止を説かれた。釈迦教団の内部では階級差はなくみな平等であったが、インドの国全体ではカースト制度はなくならなかった。現在でも釈尊在世当時のカースト制度がそのままつづいているのである。釈尊が説かれたことが神理であるならば、これまでは仕方がなかったとしても、これから先、いつの日にかインドでカースト制度がなくなれば釈尊の教えはウソだということになる。インドの発展を阻害しているカースト制度、カースト制度があるが故に心を暗くしている何億という人々を救うために、私はこのつぎはインドに生まれて、そこで人間は転生輪廻するという事実を証明して、かつてこのインドの国に生まれた釈尊は、カースト制度をなくさないといけないと説かれたと説法して、インドからカースト制度をなくそうと決心した。全くふしぎなことであつた。インドへ出発するまで、またインドに着いてからも、私は今生で生きている限り正法を伝えようということとは考えていても、来生にどこに生まれるかということなどこれまで一度も考えたことはなかった。それが靈鷲山の岩窟で禪定した時、心の奥底から「そうしなければならぬ」という決心がこみ上げてきたのであつた。そう決心したことによつて私はいままでの心が一そう大きく広くゆたかに安らかになつてきた。

このつぎ、来世にどこに生まれるかは、今生で生きている間の決心が優先されるのである。世界四〇億の人類の中で、来世はどこに生まれるかを決心した人はまだないかも知れない。

インドの地に立つて日本を顧みる時、美しい自然、なつかしい人々、自分が生まれた故里、水と安全に金のいない世界でもつとも安全な国、その日本に、親しい人々とともにまた生まれて心を暖め合う日々を送りたいという切なる心も起らないではなかった。その方が楽で苦勞しなくてもすむ。しかし、カースト制度に悩み、飢えに苦しんでいるインドの人々を見る時、わが身の安樂ばかりを考えているわけにはゆかなくなつた。インドの地にかつて生まれられた人類の救世主釈尊の教えが、カースト制度を廃止して人々の心に安らかさを与えようとされることにあつたことを知っている以上、私はインドに生まれて、このインドの地に釈尊の教えを実現させ、インドの人々を安らかにしようと決心したのであつた。

死は私の眼中から消えた。死は、釈尊のお心を釈尊が誕生されたインドで実現する喜びがそれだけ近づくことである。私はまさしく死生を超越して人生の生きる喜びを見出すことができた。私は行ける限りこれからもイン

ドへ行つて、このつぎインドに生まれ行つた時に活動し易いように、その基礎工作をしてゆくつもりである。

世界が平和になるためには、日本と中国とインドと、この三つの国が仲良く調和しなければいけないのである。インドから貧しい人をなくさなければいけない。まず、満足に食べられるという最低生活の安定を図らなければいけない。そのためには食糧増産をする必要がある。食糧を増産するにはガンジス河の灌漑利用を計画しなければならぬ。そのことをインドを走るバスの中でみんなに力説していた。帰国するためデリーから日航機に乗り週刊朝日を見たら、日商会頭の永野重雄氏が、自分がやりたい二つのこととして、第二パナマ運河の建設とガンジス河の灌漑計画を挙げていられた。世界全体を広く見渡す人の考えることは結局同じだなど思うことであつた。

ともかく私は生まれ更り死に更り、どこの国に生まれて行こうと釈尊が説かれた正法を実現するための努力をつづけてゆくばかりである。

インドから歸つて、三月二六日

「縁生の舟」は「心の発見」と改題されました。

「心の発見」三部作

神理篇 心と科学篇 現証篇

「原説般若心経」

発行所 丁105 東京都港区芝西久保明舟町一一

株式会社 経済界